重修真書太閤記

十一編 八

へ13
459
108

へ13 特
門 文
459
巻 108

清水 福寿

重修真書太閤記十一編巻之廿二

夏目舎人助再度高名の事
并狩野中山武勇の事

夏目舎人助ハ・八王子の本丸を・責破リ・上杉の旗を
こゝゝ立たやと・おめひ・きこゝゝ城門ゝいらんと・ま
ゝ処ゝ・陸奥守氏輝の・室家の叔父ゝ・古尾谷流斎入
道とく・三十騎をあひやり・横地監物ろ介添として・
本丸ゝ居たりけふろ・武功の古兵士形うしろハ・真
先ゝまちゝんて・きつゝいて・夏目を見て・大音ゝこゝ
かけゝ・ハハ・找れゝまちゝたまふ・若人ハ・越後衆と

同攻會印

見請たり・天晴の武者ふりかな・たゞ〜鎗のすゝ延たるそやいて入道ゝ・初陣より・からひ・覺え〜手詰の鎗を合をへ〜ぎこか退そといふ人ま〜ゝ・ゃゆ〜と・ゆけゆ・あやまる以・夏目ゝ袖の菱縫の裏をゆいて・ぎ・突たりけり・舍人助手ハおさ孫とも・口を〜やあの入道めゝ・口あやせ〜ことよと・鎗をひきて・入道ゝ眉間を見やけ・ぢき入るを・入道さいゝゝ剛のその〜・場ゃぎ多きその形をハ・ぢゝ〜沈むと見えけるゝ・夏目ハ鎗をゆきそゆ〜城門の戸びらゆ・そゆ〜と立・入道これをゝかよう・ゃゆ〜と打ひら・延たる鎗ハ・手ばめゆよの・ぎそ損多〜と・むゆ〜の

武士ハ・くちくせゆ・ゆ人ゝるものを・若武者形をハ・き〜ぢらぬも理ゝ・御邉のその鎗・二尺ゝ〜ゃく・あらゆ〜ゃハ・入道をでよ突れんものをといひけ・ぢハ・舍人助實もとゆめひ〜ゆや・鎗の柄二尺きゝて〜・いゝゝ入道どの鎗の指南の御禮ゆ誰ゆて・ゆ何れ・ひと突ゆ法きて・御感ゆ・ありゝらんと・うち振〜・き〜〜ぢ〜を・入道よびとめ・いゝゆ・ゆのき人この入道を法きたまへやと・立向ゝを・夏目ゝ法・ゆゝ・嗚呼ようゆ〜・入道どの・戰場の故實をしゝた・まゆのゝぢゝ以・ゝゝゝの底まで・剛ゆ〜て・すゝ其手さきの猛きを・若くはゃゝの御時ゃ・ゆゆひ座ら

れく・拉ゃ〜くい・軍い天下のいくさなり・入道どの
ゑ・遺恨おゝ・まさ富の敵ゑもあらば・ゑらも・余年の
いくゑどぞや・そや落たまへて世をのがれたまへ
といへい・入道腹をたて・慮外ろうゑ怪めこの入道
ゑ落よと・ゑ・汝らこゝろゑ・比へくろ・その儀ならば・
容赦せゝと・いゑまゝゑ・夏目をけゝんと・ゑくこけ
はを・夏目いゝゑゑ・この老人ゑ武勇の故實者同し
くい・生捕ゑ捕ゑやと・おりへい・ゑこゝ去さうて見
えゝ処を・藤田ゝ手のこの・夏目ゝいきよゝ・かけぬ
けて・入道どのいざ御相手ゑと・莞尓と・ゆらゑ・入道
きつと是をこて・北國武士の下臈めをけゝをれと

いひかゝら・鎗のまんかゝ・二ゝ三ゝ・取てうちふり・
眉よりたゝく・ゝけ突ゑ・はゝけふゝこの年頃の
手練の功・あやまゝゝかの武士い・両眼の間をゝき
つらぬゝれく・其のまゝ其処ゑ倒れけゝ・夏目い・城
門をゝ出いゝ・八王子本丸の一番のゝと・よゝゝれ
い・ゝ孤て・さゝ圖をうけゝ・その上杉の旗をおゝ立
たゝ・古尾谷入道流齋い・今日をゝさゝと・死をのく
はひゑ・きゝまゝれゝ・上杉勢多くゝゝ・ゝゝゝ入道
ゑ・ゝき去ゝゝひゝ三十騎ゝ大ゝゝ討ゝゝのゝゝ
六七騎ゑゝゝゝゝ・入道一人い・手ゝをゝゝ・討
のゝゝれゝゝその共をゝゝゝけて・横地い・何と彩ゝ

しそ・先刻より・余程のあいだ・ありぬる・何處ゑ・戦ふ
やらん・処も・もちろん・死生も・もちぢ・いろゑや〳〵と・
たづ孫〳〵そ・さ〳〵・のけ・横地どの・ゑ・ハ・そや・御落ハ
いと・申さば・入道大ゑ・いやう・籠城の・そ〳〵・中ゑ
横地さかりハ・流石ゑ・追れ〳〵と・おりひ〳〵・そのう・早
落〳〵とゑ・ゑくさもゑ・ゑく〳〵・いろゑ・ふせそやと・おどろ
ゆゞ〳〵〳〵・横れとも・をへき・様も・ゑ〳〵・入道馬ゑ・打
乗・大音あげ・これハ・武藏の國の住人・ゑ・古尾谷四郎
入道流齋・そ〳〵のうて・七十三歳・上杉勢のうち
我と・おもゑん・人ハ・御出あるや・むか〳〵・風の・ハくさ
して・若き・衆のわらひ草ゑ・せざやと・浮さろ〳〵・切

さ入・上杉勢ハ・ち〳〵めよう・この老人一人・何ゐどの
をうあはへき・そのうへゑ・夏目ゑ・去きうゑ・感心し
のは・古實者・ゆう・是をうのとも・てゞらと・いきれ〳〵
あおゑと〳〵〳〵と・引ちゃへ〳〵〳〵けゑハ・入道ゑ
ゑ〳〵〳〵・腹をたて・老ゐと・くゆ〳〵きをのゐ〳〵・左様
ゑ・我等をあおどろたまふも・年のゆゑ・おふく・ゆく
たふ故・形る・技・いでそのやうゑ・嫌ひたまふ・老武者
の・死出三途ゑ・ち〳〵めて・おもむく・武者ふうを見た
まへやと・いひ〳〵・鞍の上ゑ・立あがう・塊をぬぎて
郎等ゑ・わ〳〵〳〵・鎧の袖を・ひきちきう・高紐きうて・胸
板ゑ〳〵さけ・腹十文字ゑ・きらんとを・ゆを・夏目舎人

助こなとそのまゝ・ちゝよう刀めの手を・去めり
と・取い・左の手ふく・馬手指をぬくよと見めるよ・い
ちもやく咽のくさろと・突切て・息い・絶のまゝ・絶よ
けり・これをこんなうの・推かへく・おしすぬそのこそ・
おかうけれ・夏目ろ郎・従・大場主膳・入道ろ・死骸を・搦
上・八王子の禅院よ・送葬し・相富の・佛事を・修しける
とかや・兎かくもかうちよ・加列勢・森彦太郎・横山大
膳太田但馬守いめ也ゝ・塀をのうこ・ろ・こ入
ちこいう・鎗を合せしてとよ・敵ふも味方ふも・討死
手負そのかぎ・ちらに・城中ふてい・中山・狩野ろ・死物
くるひふくこなひまはる・その花々しは・敵味方の・眼

を驚かしける・中ふも・肥前守・利長・小たかを・所よう・
たしかよ・見たまひ・あの・追かへしめもけしく・戦
かふめめい・誰かなぞ・降参のそ・中よ・かれらを
知たるめいかきやと・たづ・ねたまへい・中山・勘解
由・狩野・一菴と・答ふ・誰ふても・入魂のそのならば・彼
等ふ・肥前守・利長ろ・いふべきこのあはきと・いへや
と・のさまへい・金子・紀伊守・小岩井・雅楽助・年久しく・
懇意せしそのこと・いふ・利長をくたまひ・ぎをおそ・幸
ひかを・そやく・城ふ・入ろ・両人をよくおしらへ・同道
しきをとろ・出立せしよ・中山・狩野い・出めめそと
軍して・今い・息ゝきれたろ・いざ・自害をへしとく・一

間所より引きあつ〳〵ろ静かに腹をきろうたろ。ぢろはよ。金子と小岩井と二人とも。足さやかる中間をそ〳〵らせ。先案内を申入。中間二人とも。中山ろ九へ参り門をあけよ〳〵と。呼されども。答ふるそのもおく。金子小岩井ちろときろ。見れとも。門をハさ〳〵かさめく音もせず。そ〳〵や落たるよやと。門の脇を出〳〵やぶり。入て見れハ。勘解由ろ妻手疵をひおがら。苦しげなる聲よて。ぢれよ見えたまふハ。金子どのろ。よくも御入ひそめかな。勘解由ハ子供二人と。助六ろ妻と。ぢ指ぢろ〳〵ぬ〳〵も。腹きろてひ。自もおく〳〵ちよと。自害しひろ。死ね申さん。金子の手をやり申度といふ。ぢ。紀伊守いやとよ。大将のたをけたまふよ。よろ。御使よ参り〳〵ぢろ。ぢろはふ。この時宜ふひ。せめて。御身たをやりたまひ。おき人々の菩提をと半分いたせ。大将の御はやひといとふ〳〵からハ。金子殿ハ降参ありのぢろ。左様の侍の手ハやり申さん。といひおがら。刀を取直し胸元をはしりらぬきて。死〳〵てけり。此中山ろ妻といふハ。後藤主膳ろ女ぢろ。ぢの子助六といふハ後ふ。勘解由照守とのふ。元亀元年高麗郡加治郷の舘よ。生れりとハ。今年ハ廿一歳ぢろ。弟を佐助信吉といふ。此時二人とも。陸奥守の供〳〵て。小田原よ籠り

くわう助六ろ妻とハ遠山民部少輔ろ女あり後ハ
照守をめして父ろ本領四百石找たまそろしか次
第ハ御恩を蒙る三千石をたまひ御旗の奉行とお
けり御馬の師範ハおしたまハ忠烈の孫枝繁昌し
照守の玄孫ハいくろ一城の主と称ろ三万石找領
とまさ照守の弟佐助信吉ハ常陸國ハく万石の禄
を賜そ佐一菴の嫡子主膳正祐範ハ小田原籠城の
列ありけるろ主膳ろかさめし役所の前ある海上
を五六艘の船おぎ通りけるハ役所ハあるを八王
子の勢と見ゆ故これハ八王子ハて生捕し人々
あり又是ハ中山勘解由ろ首と狩野一菴ろ首ハて

ひとて僧ハめさせ中山助六狩野主膳ハあくハ御
渡りひろ父ハ對面あるへしといそせ二ハの首の
箱を沙のうへハ置けとハ籠城せしものどもいひ
しもこの生捕の中ハ父やあは母やおさんとて心
も空ハあり内をさける中ハいきて助六主膳の両人
ハ父母とでハやくありたまハらへを生て甲斐あ
りとそ〻ちハ役所の番もおのりやら拵るや世
ハありしかとやや八王子ハて討死せし侍ハ荒井
治部少輔照治同又左衛門尉照久市村小七郎行氏
小林隼人正次村岡半六郎貞久以下三十五人あり
とやや

野州佐野城をゐる事
幷武州岩槻城責の事

下野國足利郡佐野の城といふは鎮守府將軍下野大掾藤原朝臣秀郷十代の孫佐野太郎基綱うしなひて住けるを舘なをしいよいよ氏とよひいるゝ形ゝ一族ゝは上佐野芝田戸室山越阿曽沼角折木村南摩小見舟越中江川久賀田沼飯田關口おとゝいひしも人數持ゝて佐野家の羽翼たり基綱十一代越前守盛綱ゝ代ゝいよゝ關東分列して上杉方鎌倉成氏方と二ツにわかれ合戰畫夜やむ時なし是ゝ出いく盛綱も城をきつきて不虞の備をなすへとなり

盛綱四代佐野小太郎豊綱のちゝは隼人正といふ豊綱ゝ三人の男子あり長子は小太郎昌綱といふ家督たり次は天德寺の昌誉上人次は關口佐渡守綱之形ゝ去ぬる小太郎昌綱天正二年四月八日卒去法名は天山道一といふ嫡子小太郎宗綱家をゝ修理亮といふ天正九年佐野領内彦間の城を上野舘村の城主長尾但馬守顯長のたゝよ攻とられしを我無念ゝおもひ同十一年正月元日足利へ押寄有無の勝負を決をへしと評定一結し本海道は人も去り遠し彦間郷より名草へやくつて押行は足利へ着まて太れゆこれを

去るとのあるまゝ、元日は、祝義の式、多く大形油断の処へ、おしよせは、敵はさめて、狼狽しいへくやしは、屠蘇の酔まゝ、足腰も、立まゝいなとこの圖をさのをおと、下知しける処へ、家老の大貫越中守氏之、竹澤刑部少輔宣冬、山上輝氏入道道及、津符子右衛門兵衛朋業等一同まゝ申けるやう、正月元日は、天下一同無事太平と、祝しいはゝへいて、合戰を企てらはゝ、と、去るはへのらは、敵の油断は、元日まゝ限る、まゝ、今一應御勘弁あらゝ去るはへくはと、申けれは、宗綱以のゝ、不興ふして、奥へ入たまひけるゝ、駟馬舌まをよゝ氏、といふとあゝ、さてまゝ、いくさの

方便を定めたゝ、事延引まゝ及さゝかへいて、敵まゝよせらるへゝ、とゝや打立のとゝとて、天正十年十二月晦日、丑刻、近習馬まさゝ、百騎さかゝ、彦間の郷ふゝ、ゝて、うちたまへは、家老のゝのとゝも、何ゝいゝ一人も後ゝへきおゝ、ゝ、まゝ、装束して、馬をさゝとれは、先陣後陣のゝのあゝ、十町さかゝも、おくまゝたゝ、宗綱は、血氣の勇者ゝ、真さきふさゝ、ゝゝや、足利の城門へ、いまさゝ、ゝと、ゝ所まゝ、さゝの林はゝこの野中まゝ、貝吹たゝは、此方より鐘をおゝ、又は、銅羅をゝたゝて、數百の人馬をせちかゝ、中ふゝ、彦間の城代、小曽根筑前守甲曽ゝて、さゝまゝいゝ、

小筒を取てかけむかひ撃れへ寄たまふを佐野の人々と見受たり左あらんとれかゝ〳〵おのゝ儲けゝとみてゐ是ハ彦間の城の小曽根と申そのかゞ用意の鉄炮をまいらせいそゝやといふまゝなきうゝとさかゝ火蓋の音ふゝ此真さきみもゝんたる武者の胸板より血けふりたてゝ馬ゐもたまらゝ真逆さま落るを大勢うちかこみひく処へ足利勢をい〳〵かけきたり佐野勢をさうちらしてのち小曽根ら討ゝ大将ハうとゝめてうる〳〵心法さ足利方ふゝ勝関をあげて万歳を祝〳〵けり又佐野方ふてゝ大将横死の〳〵ち女子一人あゝて家督の男子おゝ〳〵ハゝ〳〵せんと評定しけるゝ宗綱の叔父おゝ〳〵ハ天徳寺の昌誉上人ハ佐竹の子息を養子ゝ世そやといふ家老の大貫越中守竹澤刑部少輔津布久右衛門兵衛山上入道飯塚高瀬小見かといふ人数のちのその共ハ鬼かく北條一族の内さゝ去らハへりれといふ人よより天徳寺ハいゝりて上京〳〵黒谷ふかくれ住〳〵けりその〳〵ち家老共の〳〵ろのまゝゝ北條氏政の弟おゝける左衛門佐氏忠を以て宗綱の女よめゝ〳〵せて佐野の家督とおゝ〳〵かとゝ佐野の家老とも相あらぎゝふて静謐おらさろけるゝよゝ氏忠ハ常ゝ小田原ゝあゝ

て佐野ふあるを稀ありけるふこの合戦出來マの
れハ氏忠ハ小田原の小峯といふ処を成て居たろ
しゃハ佐野ふハ家老ども籠て居て尋常ふ合戦せ
ざやと思ひける処へ關白殿下黒谷ふやくも居
たりける天徳寺の昌誉上人をよびいざ〳〵佐野ハ
關東の名家ありて断絶をべからハ佐野の一跡御坊
ふたまたはとありけるふよろ天徳寺昌誉上人佐
野ふ下て家老とも ふ其の旨を申さら〳〵たりけも
ハいかもとも異議ふ及さハ天徳寺を佐野まいれて
本主と仰き〳〵ふどふ佐野城ハ弓矢の沙汰ふ及ス
ハたちまちふ關白殿下の旗下とありふけりよさ

上野國甘樂郡西牧の城ふハ武藏國神奈川青木の
多米周防守藤澤の大谷帯刀左衛門尉こめて居け
はを蘆田の松平修理大夫康國たく一手ふくせめ
ける様多米大谷とも ふきこゑし勇士ぶろをこ〳〵
も出ちかぢ突ていく〳〵こ〳〵様専途とたくやひ々ふ
ろ寄手ハ大勢ありて城方ハ小勢ぶろ終ふうちまけ
二人とも一足もひかぢおかし枕ふ討死ハ蘆田ハ
他人をまゝ〳〵ハ一城を落をのゝかハ世ふきこゑ
たる北條方の大将二人うち取て さハ信州の
蘆田右衛門佐の子不とあると關白殿下の御感あ
さやらハ様をよろ又同國同郡石倉の城を攻々ふ

ふ・何とぞおもひけん・石倉志きろうふ・降を乞ふよう・修理大夫・これを許し城を請取石倉をよびて・對面あるにほ・その座敷ふて・石倉ふたかは・心いろ〳〵て・修理大夫を・討たゝ〳〵けれい・修理ろ弟・新六郎康真とびや〳〵ア・たゞ一刀ふ・石倉をきろころ〳〵その座ふて・兄の仇を復〳〵けるて・高運の侍なろと・襄美あろて・兄の遺跡をたまたろのちふ・上州藤岡三万石を領〳〵・右衛門大夫といふ・さても・北條持の城々次第ふ降參〳〵まゝい・落城〳〵けるふ・武藏國足立郡岩槻の城い・氏政の末子・氏直の舍弟・北條十郎氏房の居城ろ・たゞ〳〵・岩槻い・太田持資入道道灌の居城ふ〳〵て・その子・信濃守資家・その子美濃守資頼・その子・美濃守資正・入道〳〵て・三樂といふ・四代相傳ゆ〳〵〳〵処ふ・ろ〳〵ろ・永禄六年正月下總國・國府臺の軍ふ打まけ・常陸國ふ出奔〳〵けるのち・岩槻ふい・三樂の長子大膳亮氏資の居たろ〳〵を・北條氏康大軍ふて・寄をきろ〳〵かい・尋常ふ防戦〳〵たろ〳〵かとも・城方小勢ろろうへ・次第ふ落うせゝゆゝい・氏資終ふかかゝ氏・氏康ふ降參を・去ろほふ・氏資同九年八月三舟山ふ於て・里見と合戦〳〵て・討死〳〵・女子のみありて男子ふ〳〵・よつゝ氏房を養子とふ〳〵・太田十郎と・称せ〳〵ろ・去ろほふ・この亂いでを〳〵かは・氏房い・廣

澤尾張守・河合出羽守・細谷九郎・春日左衛門尉なんとをもゝめ・三千餘騎みて・小田原ゟ籠ア・岩槻の本丸ゟハ・伊達與兵衛尉・二の丸ゟ妹尾下總守・太田備中守・庄岡源太左衛門尉・宮城美作守等を籠たりけ

ア・あらはゝ・天正十八年四月廿六日・淺野弾正少弼・木村常陸介・本多中務大輔父子・鳥居彦右衛門尉・元忠・平岩七之助親吉・以下一万三千餘騎みて・十重廿重ゟ・ちををかちゝ・攻やゝ・はゝ・本多ゝ侍・梶金平・七里鎗九郎・といふ・大剛のもの・たゝ二人・逆茂木引のけ・ゝぶれいる・太田ゝ兵士を七八人・手の下ゟ・きつて落ゝ・又ハ八尺もやりの・金棒みて・うちひゝぎゝ

たゝかひける・ゝて・城中よりも・庄岡源太左衛門と名乗て・討ていぐ・去ゝ・ハ・切合りふゝ・やるゝ・とやゝ・ゝ・ひけん・塀をこゑて・逃いりたり

重修真書太閤記十一編卷之廿三

岩槻本丸合戰の事
幷本多平八郎忠政武勇の事

岩槻城籠る処の侍とも必死を致して よくこれを
まもりて太田十郎氏房のよく士を愛し民をもち
しゝけるゆへ故とも也 全く道灌齋入道の此
城を取立ける時より末代をまもりたゝかうけるゆゑ
城より二里の間の百姓どもも籠城役といふことを
約束をきけるゆゑ今ハいつくにても用ゐ立ることやゆゑ
籠城役といふハ如何なることぞといふに まづ城を

重修真書太閤記十一編卷之廿二終

ばるを二里の間の百姓へ名字ばあさへ刀一本さ
ゝを後世はゝしたろよろゝ名字免とゝ年貢四斗を
かゝ処ゝゝ一舟を白るゝ刀給とて男子十八歳よ
り六十三歳まてハ日々ゝ箭竹一本を納めゝむ去
ゝよろ城ゝ事あろ時ハ名字の地下人ゝゝ刀を帯
て口々をまゝろ鳴子ば引て案内をおさゝむかく
のゝゝゝまゝ陸ゝ形る仕置おゝゝハ竹の根を堀とろ
て堤の心ゝ用ひ松杉の株の土をゝらゝて焼松の
料とおゝまゝゝ十七歳以下十三歳以上の地下人の
子供等乃草刈かゝをば をべゝ城よろゝゝを渡ゝ
年々ゝゝを新ゝおゝゝかゝ岩槻城の二里ゝ間

ゝと草刈籠の多ゝ処ハおかゝゝとなろゝゝくゝゝ
籠城のゝゝめ箭竹のかゝば改めらゝゝ大九百餘
万ゝをよひ焼松の料の松杉のかゝハ三十餘万あ
ゝゝとかゝゝこの餘のゝのゝ是ゝ准して推ゝかゝ
へゝ是等ば以て籠城の防禦ゝあてゝかゝばをでゝ
数十日ゝをよへとゝ城中ゝらゝ乏ゝゝゝの形ゝ
草かゝおを集めて堤の上ゝをゝ形らへゝゝゝゝ
土砂塵芥を閉めて鉄炮をゝくゝゝ楯と形ゝ松杉の
株を路ゝおゝゝよくゝゝを為て是ゝ火を付けゝかハ夜
のかゝゝゝゝ焼ゝをよゝゝ寄手ハ名ゝをゝ武邊巧
者の人々おゝゝゝゝ攻おくんてゝゝゝゝゝけゝ妥

ゑ・鳥居彦右衛門尉元忠の郎等・ゑ・寺田喜兵衛・安藤孫四郎・小田切又三郎・一宮左太夫かんといふ・死生をらぞの・剛のその・中ゑも・安藤孫四郎・もくゝ出て・申ける々・味方ハ大軍ぞう・敵ハそのいの・勢おるゑ・加やうゑ・城をまめうて・居るそかう・そろ〳〵しさ・軍もせよ〳〵・はそとゑ・小田原落城ゑをよひおば・いろゑ面目おくゝ・あふまーさや・軍ハ我等の・いくさから孫と・恥辱ハ我等ゃちぢよ〳〵・ぞう・いさや・一攻せめく見へさぞうと・とく・鳥居の旗おるーをおし・たて・息をもいろせよ・攻付しゃハ・そや新曲輪を打・やぶう・隠居曲輪へおしーいけう・城中ゑくハ・山口平

内・山角彦三郎・板部岡・佐枝おといふ・一人當千の兵・とも・ちーさそう・身命をすてゝ・防きたゝかふ・巳・の刻より・午のこくの終まで・敵味方入替〳〵・三十・餘度の合戦ゑ・上方勢ゑをふくうされしゃ・城中ゑ・・・て・今日をかぎりと・死を善道ゑ守る・一足も引おさくめと・諫め合たぢーめおから・突合ハ・山口・山角・穂坂大炊助・鈴木市兵衛おと・一人ものちらゝおか・ー枕ゑ討死・と・鳥居彦右衛門尉・これ・ぞて・安藤寺・田・小田切・うゝ・ぞかりぐけと・下知ーけ・ゑ・我劣ら・ーと・乗込たう・文平岩の攻口ふて・ゑ・城中ゑう・出ー・物見の兵士を追かけゝ・ゑ・餘ゑ・手おげくおく

れて逃るべき道のかゝりけるゆよう案内者おゝ
へ堀をロさろて城よ入寄手これをきて中くい堀
ゆあさゃうけるとく大勢ひゝ〳〵と飛へ〳〵渡
らんとすれい堀ふゃくして勢たゝ以あさて深さ
めく処を見をまし城中より鉄炮の筒さきを揃へ
撰打ゆぞうちたろ是い只一処あさき処のあるけ
るを知て之のうゆ口ろ〳〵形ろ中ほとゝ以よせ手
大軍おれい在家をおぢて打入〳〵足〳〵り
をたくろ終ゆ塀きたるゆいきゃやてこれを踏こ多
おめきはらんて責入十方よりこのもて打たゝ〳〵のた
ゆ本多中務大輔忠勝三の丸を取結總軍一度ゆ攻

いれい妹尾下總守庄岡源太左衛門をこゝゝ以さい
ゃと鎗を持くまちゃけ敵をちゝ〳〵とひき付一度
ゆ撞とはひくいで面ゝふらゆたくゃふたつ敵味
方のゝうこゝゝ以関をつくゆ聲矢さけびの音天柱
たちまちゆくゞけ地軸たゞいま折おんとゝゆゝ
と疑たゆ妹尾庄岡手のこのゆむゃつく申けるゆ
たゝ〳〵ゝ以今日をゃぎろの命ぞやゝ兎てゝゃく
て以死ぬる道ゆ同ゝき形ろ臆して子孫の面をけ
ゃをゆ一足以とくんて名を万代ゆのゝせやと下
知ゝゝ以いく度と形く突ていで火花をちらゝ今
を最期とおめひきゝゝゃゆちゝいく敵もお

しかるに本多平八郎忠政行年十六歳・真先にすゝ
んで・敵の息もつがせず・我にむかへと呼はゝり
鎗を入んとするを・妹尾・片岡これを見るより・平八
郎忠勝の子なるべし・我等にとらるゝは・相手にとは
も親気なし見もてんとされは・されはかゝる時・天晴
日の出の若武者やと・深く感じて突かけければ・妹
尾は・古兵士なり・片岡は大兵にて大力なり・本多は
若し猛虎の羊をせめてあそぶが如く見えければ・い
かなりしたりけん・平八郎忠政が突きける鎗を
受そんじ・手を負ければ・平八郎得たりと・踏込終に
妹尾をうちてけり・忠勝が侍・三宅理兵衛・鈴木九左

衛門・忠勝の旗を本丸におし立てたれば・諸方の寄
手これを見て本丸をせめや中務大輔が乗取たるぞ
やつゞけと込入たりしかば・片岡源太左衛門
尉今は是までなり何まで命をたすからんやと寄
人々といふまゝに八尺あまりの金棒を打ふりて
四角八面にたゝかひ立しかども鳥居が侍寺田喜兵
衛にくし片岡源太左衛門捨てなのきぞと聲かけ
て四尺五寸の太刀を以て渡りあふ双方きこえし
大力なり阿修羅王のあれしが如く獅子と醉象の
あらそふに似て實に目ざましき合戦なりし片岡が
いらいて打込金棒を寺田やくへに引はづせば寺

田ろさつくゝやゝ侍大刀を片岡棒ふてさゝゝと受る六十余合うちあひしゝはらよ勝負も見えざるふ寺田太刀を以てひらき合んとおゝけは処を金棒ふて肩先をうゝれけるろ大力の打たるとおも寺田駒よう打をとちも血をそゝきて死ゝたりけ又安藤孫四郎一宮左太夫小田切又三郎片岡を打んとさゝむ城見て片岡源太左衛門益おそ罪造ゝおもども軍のおらひハせんやゝおゝ一所ふやゝれと呼さろゝゝかの金棒ふくたゝき立らも枕をおらへゝ三十餘人打死も片岡ゝ手も負ふまゝゝ狂ひまさは処を本多ろ手よう雨の降ことくうち

かくは鉄炮ふあぢら城打も て倒もゝは落重るものもおかゝけもい良時ろ引ゝてのち立あやう棒をとらんとさは処を誰といちらふくゝれあい終ふ首を打てゝろ本多ろ手よう三浦監物植村與三郎内藤源太左衛門永田甫右衛門童とおめいゝかゝゝけるろ三浦ハ山口平作ふ討れたろ平八郎忠政これをうて山口を打たゝ一刀ふきつゝ落を梶金平多門傳七郎山口嘉平七里鉄九郎等潮の引如くさゝくゝけもい本九の大将伊達與兵衛宮城美作守太田備中守以下面もふらふきつゝ出平岩ろ手へやけむゝふ平岩の手のもの妹尾片岡ふ多く

そろぼされいる恨あきい此ものどもを是非ま打
とう高名せんと無二無三まさまやうけるま
ま不思議かちたちのその脚をいためて一人倒
るれい二人三人いりまも同じやうまこけまろま
馬ふくさせよとあせはよりも一鞭打て駈立るま
馬ハもどう上りさ孫ま様ろけるふよう忽落馬し
我手の馬ま踏ゆく足腰たゆく如何ぶ也ハやく
事よとあきれさて能々見れい菱の根をきさまぶ
きまく蒔たるなういろふしてやくくちやう多分の
菱をたくへえゆふやといふまは是も籠城役の内ぶ
つけらゆこの菱をさらひくのち心やすく進まん

と猶豫処を見きまゆ弓鉄炮をきびしく打いざゆ
射かけゆハい仇矢ぶくよせ手多く的ま立たく討
れいろう木村常陸介これを見て門よりきくめばい
ぜ敵もその用意をかして守るぶ也脇より込入や
と下知ゆい真先ま立くこ塀ま熊手をうちかけ
かけあやう飛下れい下ま穴あり腦入手をいゆ
て苦しむあ也ハまく城中ようちいゆ礫ま中
りて倒るゆう此城二三の丸をハきでま乗とう
本丸も大やう乗やぶつゆこの誥の丸さもう攻
落さとやうゆとく棄ぶくへきまあらぶ去ふても
何とさべきやと浅野弾正少弼木村常陸介本多中

務大輔・平岩七之助・一人なりまう・軍の評議をかゝ
ゝたりけり・扨〳〵礫打のとや・この岩槻の地下
人の役ゑて・道灌齋の教置〳〵をかうとやや

木村常陸介智計の事

幷岩槻落城の事

木村常陸介勝成といふは・近江源氏・木村四郎信成
の後裔なり・關白殿下・長濱の城主ゑく・いまさ・木下
藤吉郎と名乗たまふ時よ・まいり仕え・後ゑ蒲生郡
ゑく・屋敷を賜さう・馬淵村ゑ住〳〵けるゑ・今ハ一城
の主と〳〵て・數万の民を領〳〵けり・今度も淺野ゑ添
て・軍の目付たり・木村・淺野・本多・平岩ゑむかひ・ゑの

城を降さんとやうに・城・思ひ付てひ・よろく・某一人
城中ゑ入りて・伊達と・一問答〳〵て見むやぞんじん
各々ハ・何と思ふ也ハやと申けるハ・弾正少弼・何さ
ゑ常陸介の弁舌ゑよりく・城を降〳〵たまふく・忠節
たるへ〳〵と・一同ゑ申けるゑより・常陸介たゞ一人
城門ゑ入りて・寄手のうちより・木村常陸助と申者
伊達どのゑ・面會をへき・要事ありく・參向せりと・い
させしかハ・與兵衛尉これをきく・落城旦夕ゑせま
るたるハ・與兵衛ういのちも既ゑ・ひきたり・面會そ
の益おくひへども・左樣ゑいとひ・いなむべき
ゑあらん・此方へ御入ひへとく・城戸を開さしかハ・

常陸介臆を内邑もおく今日うち死とおもひ定侍共の見ぬよりとく客座よりきゝ與兵衛尉亭主の座よりきて木村どの〻ぐ〻御入来いろ〻事ゝや序さらさやと申けるハ常陸介扇を笏ゝとろ直〻面々の軍ふりハをとろ關東より名を惜やせたまひ〻道灌入道どの〻遺教とおぼえハ死せる孔明生る仲達をそらをとと申てゝ似やよひてたのもしくハたゞ〻我等ゝ不審第一条ハ道灌入道どの〻遺教をたゞへたまふる面々ハ定めて入道どの重恩の人々たるへ〻さをれハ只今常陸の片野よりかく仏住たまふ三樂入道どのをそ三世の主とたのみたまふへりん先ハかく北条どの〻子息たる十郎ぬ〻をひ〻さらゝ主と仰きたまふとこそ心得〻〻ハ右也折三樂どのを迫〻ぐ〻たまふ大膳亮資房ぬ〻ハ父よ越むさ〻天罰のかをや〻く三舟山ふく早世したまふ越れふも心付たまをそて北條どの〻子息を養子と〻三樂どのふ背きたまふハいろかる御心ふやはらよ越の意を得ハ今度をでよ三樂どのゝ關白殿下へ参上あつく武藏國の本領を安堵〻たまへハこの岩槻も三樂どの〻本領の内ふてハ越れふやはやうふ龍城〻〻今日ハ討死せんとい

きよさたまへ寄手を關白殿下とおもひたまへよ
や三樂どの〻殿下の仰をうけく寄たまへべけ也
ども相傳の面々へ北條よりさがひたまへて只今
去らはべき郎從のおきまゝ我々もゝめ仮よ三樂
殿の勢とかろ罷向ていなろこの間より城中の人
ひとの武勇も心中のそども上方めゝ肝を潰ゝ
はへい面々成たるとかい臆したろといふ人あらん
やもやゝ只今滅亡せんときは北條一味のこゝろ
をひるがへゝ重代相承せゝ太田入道どのへ御參
まゐらんと誠の道とおそ申へれこの事申入は
そんため態と參りていきや御暇申候人々といひ

とて座を立を與兵衛尉去ちゝと呼とめ何よ木村
どの我等ろ譜代相傳の主たる三樂入道常陸の片
野よまやう在は事をいぞんじはへとも殿下へ出
仕していと更よ拵んじ申さ仰のごゝ三樂入道
この岩槻をたまたろ入部はそんよは我々何とく
入道よ背き申へきさろゝ彼あら今の十郎氏房と
申も主よくはひゝ大膳亮資房ろこゝろよて增と
仕ゝとあるは我々ためゝ是も主たるを勿論
よは父祖累代の主君三樂入道と現在主君と仰き
ゝ十郎どのいげをいばをと別やゝ北條どの
の子息といふそのゝ正ゝ三樂どのゝ孫姫君

の壻なり三樂どのよりよろしく申て給はへ十郎殿
無事よりくらせたまひ三樂どの御入部はそく今
ゝもあは我々城を出申へくはと云ける様を
て木村はをでよ説あんせたると心中よりよろこび
與兵衛よむかひその事はけそく子細あるまゝ
は下野佐野の舎弟ふく相續せしよ佐野の
血脉たる天徳寺の昌誉上人を召出され佐野一蹟
を賜そう入部しはとも北條の子息たる左衛門
佐氏忠よは何のたくみも形くはなれを以ておも
ひめくらしはよ當方とても十郎どのよりはまひ有
まくはと申しきかは與兵衛尉はいはよりも能々

甚かん弁して申入へくと申けるよりよろ木村は本陣へ
引かへしけるその跡よりて伊達與兵衛尉は太田宮
城よむかひ何さも木村らはひける如く三樂入道
どの國府臺の軍よ打まけたまひ常州へ落させた
まひしのち我々大膳亮どの逆心よ與しはるとて
その罪科はいろよ申ひらくとも三樂入道どの御赦
あるへからはきはよ今をてよ三樂入道は關白
殿下の御許へ暇近ふしたまはんとはいへは何とく我
ゝはんは目かけらはんべきや今明日のうちよ入道
どの御入部あらば我等を誅せらはへきと白ある
べうらはとく大膳亮どのも主君なりと何とて

背きたてまつるべきいのちをも我等ら運の極めあらんといひもさてぬゝ太刀をぬき首をおのれと見えつゝたちまち前へかき落とし宮城太田もあきれそこのうへゝ籠城その専ふ〳〵いそぎ木村を呼かへ〳〵取そからんへ〳〵とく木村を呼せけるゝ常陸介いまゝ城門をいぐさぬもぞろしかハ直ゝひきかへ〳〵此体をきて哀れやうゝあゝ申べくゝ何とていぎ〳〵参り申へきや口惜きことをなゝたりとく木村ハ涙をむせびゝく伊達ら死骸をとり収めその〳〵ち宮城太田ハ手のもの三百余人を引具〳〵いとゝ取しめゝく城を出たりけりとい

や又一説ゝハ伊達與兵衛尉ハ岩槻家老の内ゝて当時出頭ありけるゝ武勇ゝたくゝ本丸責のゝ〳〵しきゝ恐ゝからやさ城あげて降参をゝ一命を助かゝ〳〵とも云ゝ岩槻落城ハ天正十八年五月二十五日ゝ葛原三右衛門尉といふハ十郎氏房内室の傳ゝ〳〵ゝ小田原へきゝ〳〵十郎へ申やゝ落城のゝち御上ハ三の丸ゝ〳〵めらゝきゝ〳〵しハ御文とゝく出ゝをこれハ

一筆ゝ条らせハ其ゝゝゝと日夜の所きのかひハゝ
ろからぬ事ゝゝとゝなゝさいらせハ九ハへハ
ハ地の事ハひたゝくゝきゝ上方勢むうひまてゝく

足えいう形ろうをめふも・あひなんやといふゃ
しくなれ処よ・とし〜よろ共才かくふく・本丸二の
丸をわるさ〜ろうらおとい之の丸ふを〜こ
められあ所事ハまゆ〜ハん安くおやされハ
へけ是共いまさやをやらぬハ事ハそ〜ぢす〜
秋いさき秀よ〜将軍へハこかさおされハへた
もあらぬそとふらはを〜〜き責よあ之せハ
てこ後ゆをもの年罪よハ〜ゆめからんとの事
あうけをいこよふういさき入なさいらをハも
〜あされふもおそされハそ〜義理とやらんの
をちさへたりふとゆくおそ〜よさい・よさよと

からひめへてこ〜めとの父母妻子あとれたを
けおされよろ〜〜ハそんやくそ〜くハくどと
らゃとハさんま〜茅をとめ糸らをハ

めてたく
〜〜

六月廿八日　　いとゆき之の丸
小少将

くゝゃゆへ

此文例の殿下の偽作おろへ〜まとゆ女の文お
らハ・月日あろへ・のら以かつ十郎さゆといふ

所あるまゝきゝ

重修真書太閤記十一編巻之廿三終

重修真書太閤記十一編巻之廿

太田美濃入道三樂齋の事

并奥州輝宗の事

岩槻の本主・太田美濃守資正入道三樂齋といへい。源三位頼政入道頼覽の後胤として。めろこゝの楊雄の射法その娘椒花女よろ美濃守頼光朝臣より傳へゝと。はさゝへゝ。此家みゝ重きからひとおしたろけう。夫いいろ形る術かるや。此陣中みて。其かゝちゝをとこ。學ひろく見せよゝと殿下仰み三樂齋さんい。椒花女よろ法ゝへたろゝ弓い。八張

矢は二手丈は其身の七尺五寸・十九束とは・弦の間
ばかり・座陣・發向・五特・世をの〳〵表裏ゑこかちて・
八張なり・矢の尺は十二束・水破といふは・鳥獵箭お
ま・兵破といふは・鏃箭股あり・この二ツを本とし〳〵て
多くは・鏃をつくま〳〵なり・さてこの弓矢を取とき
は・眼大さ〳〵・肝ふと〳〵・かけたる蟲は車輪のおと〳〵
と見るほどまく〳〵ひとしくと迫て見へ〳〵とあり・入道は・
庶流ふと〳〵・亘授の口決・面傳の次第まてはは及とも孫
と・流石この家はへは・学ひく御覽ふいま申へ〳〵
とく〳〵・郎等ふ持せ〳〵・四所藤の弓おつとり・熊鷹の羽
の矢を手狹こ・ちゆ〳〵と・御前ふ下立かくの如く

足を踏て・敵ふむかふを挫陣といふ・陣列を挫衆と・
申とくかや・まく此膝をかくの如く折ても射くの
しはへ〳〵・次ふこの足を以て・左右の[redacted]をいよく踏
弓ふ矢をけて・鞭をうの是發向の弓の体・又は鐙を
かろくふく・鞭ふかく〳〵て・さきをはとしはへ〳〵・まく
此弓を脇ふさく・此矢を腰ふ横たへく・萱野を分る
時しはの・又この弓を杖ふつき・此矢を背ふ立ふ負・
木の下闇をゆくしもあり・日暮・初夜・人定・後夜・日出の
時をとかつく・射るはへふ・是をは五時の弓といふ・
あるひは・雨ふつはは出〳〵ふ弓矢をとり・胴結射て
矢當をためし・又は花ふもあり・葉ふも何も・目ふ見

しゐどのその城かけ・是を射あて〳〵拳をさゝむ・是を時世の弓といふ・かく申てハ・只弓の講談そゝろ物ろ・いざ・ひと拳仕らんといへハ・郎等さ〳〵ろ得北條の紋ゆゝしどろ・三角柏の葉をとりて・竹の串にさゝきて・的をたつるとハ・入道ハ弓を立て的を見ゐめ・その〳〵ち・肌ぬき弓ゑ矢をうちくゝせ・きろきろと・引出ぢろ・矢聲とゝもゑ・切てさゝかせハ・あやまさゝ・三角柏の上ゝどを・さろしと射きろ・あまゝ矢ハ・弓杖三四十つゞけり・入道氣色して・二の矢をたゝかひ・おかし柏の右の角を射きろ・その〳〵ち・三の矢をとろく・左の角を射きろ〳〵時・向〳〵ハ・串を射よとの・上意あろ・入道ハ〳〵こまろ・王際よろ八すあけく・射あてたろ・關白殿下御氣色よく・嗚呼射たろ〳〵・入道ゑ・祿給さろんとく・着させゑひ〳〵・胴服ゑ・大判五枚をそへられたろ・入道御前ゑ・まゝこよろ・胴服を肩ゑうちかけ・庭上ゑて・弓を右ゑ取りさ〳〵・聲たゝく

此弓ハ・椒花女ゝ伝さへ〳〵弓よ・朝敵の首ハ・水破兵破の矢ゑハ〳〵ゑ・といとりやろよ・唱ひり〳〵・袖うちふりく・舞終て御縁ゑ・おろよろ・大判をはくゝげ持・懐中して・退出ハ關白殿下入道ゝ弓・箭の故實をきゝ〳〵め〳〵・近習者ゑ・むかせゑひ・きゝゐろ・三

樂ゝ先祖より法くゝへたる弓の次第見たるおらん
ぢの藝の精妙かるゝと吾供しゝ廿餘万の勢の内
ゝ誰ゝ三樂の片屋ゝ立ゝ出ゝおらゝへきゝめる
あるいざしよ〳〵いだせ〳〵と上意志きろ形る時
石田治部少輔まゝいざ御勢の中ゝ誰ゝても御
免あるぞまゝ出よと高聲ゝ觸しかとゝ出れか
し仕りゝそんと申ゝもゝ形ゝうつしかゝ關白殿下
西國ゝ射手ゝおさやと再應仰られし時ゝ早川隆
景の侍ゝ真木上野介といふゝその伐いふゝたゝ上
野御前ゝまゝしこまゝ關東の名家太田入道の仕ゝ
ゝ跡へ嗚呼の業仕りていゝそのわらひの種とゝ

扣えゝ寵在ゝひしゝゝ再應の御意なゝかゝゝ西國
ゝ弓矢取ゝそのゝおさやゝその仰ゝよゝ實ゝ恐ゝて
ゝへとゝ御前ゝ伺公仕る是ゝ新羅三郎の遺法ゝ
て本間孫四郎資氏ゝ相傳仕ゝひしゝ我國上代の
藝ゝくゝ太田殿ゝ八張弓ゝ二手の矢ゝとゝ
おらひゝ弓手右手ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ見おゝ〳〵
をべゝ五段の射法ゝ坐立二ゝゝ分るゝ十段
射とゝ申ゝ矢ゝゝゝぶら蟇目角木ゝ〳〵ゝ殺矢
の五ゝゝゝ弓手の遠矢を上覽ゝ備ゝへゝとゝ
ひゝゝ弓矢を取て御前ゝまゝくゝ御前の杉の枝を
打越ゝそゝゝむゝゝゝゝゝ見えゝゝ在家の棟をこゝろ

さ〜いふいと・切くさるかと・その矢三目のやぶらかぶと・ヒウ〜と・遠鳴し・見にくく・屋の棟ま・立たるけう・筭勘の達者・長束大蔵小輔をめして・その間を校らさるふま・谷をへぐて〜・九二百間余と・法めりたるそのうち・右手を試とゑひ・はくむ〜めぢろふ・それを射る・いかとも・百間の外ふそぐ・きたる・殿下・志きうま・御感ま〜ける・折ふし・見あくるは松の梢ふ・白鷺の集たるを・あるい如何ふと・御諚まよりう・上野やーこまう・膝打立て見あげの射法・四五丈上かる・鷺のつぎさを射きるたるい・鷺はやくはたぎを・くふり〜と・羽うちつく・御庭へ落る・我取あげて

御覧まいる・残る一ツの射法・何をる仕てんと・見まそと・折〜も・俄ま一天かを曇て雷ちく・めさる・五段のうち・一段のおきい・惜けれと・雨かるめき大雨車軸をかやーけるい・殿下・真木を近ふい・せんやくなーと・仰らは・上野はくーんて・雨中ふ射られぬ・弓ハ犬の弓・いさくろ・苦〜いはちーと・言上ー・前かる谷の底ふ・雨をさけたる・兎を見出ー手先・美事ま・射とめたろ・殿下まを〜・御感あろく・御聲たろく・上野・衣たるそのい・おとくぬるたろ是を・衣かへいへとく・關白殿下・めーたる・惟子御帯まて・そのまくま・賜ろて・黄金五枚を・そへらるたろ

隆景は〳〵ご御前よりむかひ〻かへ〻こそ入よ〻申上
きの〻ち上野をよびちらづけいくも仕るたろ
と褒美〻て賞ハ歸國の上とそ申度さる此くまく
三樂齋を御座ちかくめ〻出されいろふ三樂その
ろうハ關東ふての名家といひ又弓矢とりて巧者
おうと仰出さるゝハ三樂つ〻こそ是ハ不思議の
上意かな三樂おとろ軍といふハ勢ハ二千ろ三千
ハさぎ〻とかく地ハ一村二村をあらそひ〻のこ
郡一ゐの進退せ〻をかく〻ひたとへ戦とれハ小児
のたそむゝと抑御陣のさゐゑといへハ三樂おとゝ十
陪〻たる大名達幾頭とおく音陣〻陣屋の休ハ三

樂おどの居城よりうふ美々〻く〻ハまえら原
かやうふ目さまゝき御いくさぶり我國ハいふゝ
及さゝ唐土天竺いけとゝむかふくゝ例をひかん
おろ〻〻以て意ゝ言葉も及そゝと申上〻よよ
つゝ關白殿下打笑せたまひ三樂ゆゝ〻休息い
たせ又ちや御對面あるべきかろと御懇の上意お
ゐ〻ゝ処へ陸奥の伊達越前守正宗家老片倉小十
郎景綱を召具〻三千餘の軍兵をひきひく參上ゝ
關白殿下仰出さレけるハ小田原征伐のため春御
下向出つゝよ只今參上仕るゝ御不審をくおから
ゝ去おから格別の思召を以て その罪科を勘ふる

み及さん速ま本國ま罷かへり御旗をむかへ奉る
へ〳〵たく〳〵その方近年切取処會津仙道を返上を
屋〳〵米澤三十萬石ハ元の如く領さへへと仰出さ
れ其〳〵ち殿下白衣のまゝ正宗找め〳〵出され諸
大名の陣所を御見せおされそのゝう陸奥ハて小
ぜう合ハ巧者かるべく乙とも加様形る大軍を
引まち〳〵たるて御ろまゝきかろう猶見をへき所あ
る此方へきさ乙小性どもそのの刀正宗ハめさせよ
扨のゝう共御供ハ及さん と仰られ只二人ハて石
垣山の高らへ上らせられ乙ぞ〳〵御物語あるく扨
のち御暇たまさる本陣ハかへ庄倉小十郎景

綱まちうけ如何ハまし〳〵けるハやといふ正宗
かう〳〵と答えたまひけはをきて景綱よりめ
ひらしの大将車やむかしの後も又あるまゝと主
從舌をふるうて歸國せう景綱ハ加藤次景廣の後
創あり八郎左衛門尉景継信列庄倉ハ住しきかい
庄倉と名乗しとい庄正宗今年廿七歳勢ひきく耿
あり扨も〳〵正宗の先祖ハ大織冠八代中納言山
蔭卿の末孫藏人朝宗さ〳〵めて奥州ハ下向し伊達
郡中村ハ住々しハ伊達の藏人といふ乙よう伊
達郡の兵士を領しけるかそのゝち弾正少弼宗遠
ら時ハいさう信夫荒田柴田伊具の四郡を合せ〳〵

といふ・宗遠七代左京大夫植宗・葛西・大崎を取・その孫左京大夫輝宗・二本松の左京大夫義継と・たゞ〳〵合戰しけるゝ・天正十三年十月八日・不慮ふ輝宗・横死あり

大崎義隆の事

并伊達正宗小田原參陣の事

輝宗・天正五年・三十五歳ふゝ・家督あり・二本松と云ふ・奥州管領・畠山上總介・高國の後なり・高國の孫修理大夫國詮ゝ〳〵めて・二本松ふ住しけるゝ・五代左京大夫・義継の時ふいゝ〳〵つゝ・伊達の所領・信夫郡と・二本松の領知・安達郡と・堺を接〳〵けるふよゝ・たゞ〳〵

相論して・合戰ふをよぶ・ゝ〳〵ふ信夫郡八町目ふ・伊達兵部少輔實光入道といふ・そのなり・義継とい・無二の懇意あり・二本松と八町目とれ・そのかふ一里卅一町を・へだてたゝ義継大槻中務といふ郎從をして實光入道ふ說しめ和睦の義ゝ〳〵のひ・十月六日・義継阿武隈川をつゝゝ・輝宗の陣所・宮森ふいゝ〳〵ゝ・ふいやゝふ・八日輝宗義継對面の席ふゝ・和睦やふれ・義継ハ・大兵の大力形ゝ・輝宗をいけどゝ・ゝ〳〵ふ馬ふのゝ〳〵・引かへ〳〵けるを・正宗追かけ・高田と云処ふゝ〳〵追ひめ・義継を鉄炮ふゝ・討たゝ〳〵ゝその王あやまりてゝ・輝宗ふも・をよび〳〵とかや・ゝ〳〵大崎の

左衛門督義隆といふハ八幡太郎三十一代の孫ゑ
して奥州一方の管領として志田玉造栗原加美黒
川五郡を領さたくしこの義隆といふハ伊達左京
大夫植宗の三男なれハ輝宗とハ伯父甥の間やら
ゐう去らはゑ義隆近習の小性ゑ新田刑部といふ
そのなう天質美麗ふして二八の花の春まことゑ
窈窕たること天女の如くあう けるゑよう義隆これ
を愛し軍國の政ゑをこたりけはを以て家老ども
この刑部を遠さくんとをかうけるゑ義隆やく
伊場總八郎といへる美少年ゑこゝろ伐うゐ終
ふ新田を外様ゑいぐゝたう新田刑部ハ寵愛を伊

場ゑ奪されしことをいうう伊場伐討くゝらこゝを晴
さやとかしけるゑよゑ一門中を催促しけはゑ
新田ゐ一族同心して この ことを伐義隆ゑ訴ゑ義隆新
田をめして事のよしを問たまひけ伊場ゐ怒
て新田をうらんをを怖れ鷹野の装束ゑく新田を
むくうたまゑ名生と新田とハ行程七里をへくく
たう新田ちゃくかつるゝかハ今ハこゝろ安くとて
義隆ひさやへしむくんとかしたまゑを新田の一
門是非ゑこの方へ出くまくひへくく新田ゐ城
ふ入奉る伊場ハ元よう勢もかく一門とてゆゝゐ
さるしゃら孫ハ磐手山の氏家弾正をたのくゝゃ

氏家伊場を同道し名生の城へ上り義隆より訴へ申
なかば義隆さては新田より入たまひし跡あらそふ
よりより氏家伊場が名生まとゝまり義隆の養母及
び義隆の御前からひみ若君を質とりて謀叛を企
て加勢を米澤より請申けるみよりより氏家彈正父の
三河守正宗の前へいでゝ名生の騒動やくの如し
かくて是五郡の御仕置ものゝ〳〵やはまゝく
左衛門督どの新田刑部より御まよひなりとゝ累代の
家老たるそのを伐とあゝたまへい督のとの御
身の上心元なくぞんじ奉ると申けるみより天正
十五年正月十六日正宗一万三千餘人を引卒して

名生へ發向し義隆の政事伐たきけんとしたまひ
けるを義隆大きにいかり正宗ろ振舞やをい
て切処へうち出その不意を討て是伐うち破らん
とその手配へ及されけるに伐家臣一栗兵部權大夫
といへその義隆をいさめけるい正宗の勢一万五
千と三〳〵實ハ二本松勢伐合せて三万ゆをよび
べし掛合のいくさをやかゝんべうらに要害へ御こ
めろいく謀を用ひ御合戦ものはへくいと言葉た
くゝみいさめけるこれい一栗ろ家臣小松幸右衛
門といへその子を幸太郎といへ美少年あろけ
ゝ伐一栗たくひかきめのみおめひ十三歳より手

元よめしたかひ寵愛あらんかぎりなかりき
或年義隆鷹野よいでゝ八幡さま一栗ゝめとへ
立寄たまひしかい兵部權大夫大よろこひさも
ざ饗應おもくなし配膳ゝ幸太郎を出しけるに義
隆これ見ゝひ終ゝ大崎へめしけるたまひ伊場
總右衛門ゝ子とおもゝ伊場總八郎と改名して寵愛
したまひけるを權大夫いろゝゝ無念ゝおもひ
色ゝい出さ孫と義隆をそろぼして總八郎をとろ
かへさんとやくそくすると後ゝいゝおもひ知れ
たゝ然るゝ名生の合戰やゝ氏家彈正い磐手山
ゝおもゝけゝ紛れゝ總八郎を一栗ゝ手へ生捕た

ゝ兵部權大夫大よろこひ深くかくして置しか
とゝ誰いゝと形くこの事義隆の耳ゝ入てけゝ義隆
ふかく一栗をゝくたまひいろゝゝもしてこれを
討ろぼさやと種々ゝ心を苦しめたまひ正宗
ゝこれを謀られしかとゝ正宗これをきく入たま
ゝ必竟この亂の元を尋ぬゝい新田刑部ゝ起ゝ
たゝその新田ゝ寵愛を得しとゝいゝ男色ゝ今
ゝ氏家彈正ゝ謀叛せしゝ伊場總八郎ゝ男色ゝ
ゝ事のゝゝ及ひしゝ多くの士卒をくふしめ
大切の農業をさまさげゝしてのゝ其功何こと
ゝや是いゝからゝ只打捨置たまへと申て

正宗さらよ取合たまよとゝ義隆もせんやく〻形〻其
まゝ・ふ・ふ〻ゐひ〻と・正宗ら一栗兵部權大夫ら城
ふむかひたまゝぬ我・拙〻兵部を恐ゐたまふかと・
いふ人もあらう
正宗を木の葉さるかと出めひ〻ゐ・一栗をハ落
さ〻ゐそうと落頃よはくうく四方ふらさひ〻ゐ
ハ・正宗やさよう
よ我るのゝ見れハ木の間の一ハ栗終ふハ猿の
飼食おろへ〻と作ゐかへく唱せ〻とゐう・然る
ふ・伊場總八郎ハ・兵部權大夫らめとゐ・かく也居た
ゐ〻やとらいろふゐ・新田刑部を恨うく〻・それを

殺さんと・一栗を〻のび出けるゐ・新田刑部もまく〻
伊場を討んと・白糸の腹巻〻・猩々緋の羽織を着〻
黒き馬よ打のう・穂の長さ二尺・柄の長さ二間の鎗
をとう〻・伊場總八郎らやくれたる処ふ・そこう〻
遂ゐくれを討てけう・その〻ち・兵部權大夫ハ出羽
國ふ・立越嶽上義光をたのうゝとやや・正宗ハひゐ
二本松・大崎・一栗おとを合せ・百五十万餘を・知行〻
〻けるやゝ・今度關白殿下北條征伐ら〻て・小田原下
向の沙汰我き〻・いやゝとへきと・家老中の異見を
きゝもとけるふ・各申処まち〻〻ふく〻・あつけるゐ処へ・
片倉小十郎きくゝいく〻・何れふも・小田原へ參上ち

かはへきよ〜浅・申をこかひけるゑよう・はくこそ・
庄倉と共ゑ・小田原へ・参上おし〜たまひのはかゑ也・是
ゑはき〜きて・佐竹といひ・結城といひ・東八箇國の名
家いのゑし〜・膝を屈し〜手をそろく・軍門ゑ列を
ひく・その綺羅整々そろ〜て・馬鞍ゑい・家々の紋を・志
ろ〜・旗の手ハ・箱根ゑろ〜ゑ・おびきの・十騎二十
騎百騎・二百騎・ひきたて〜〜伺候〜て・さ〜〜の
土産を獻〜おくさめ奉る・と誠ゑ美々〜〜くも・まゝ〜
めぢゑ〜〜・四十年のそのむかし〜・此小田原の小者
ゑく・衣食ゑとそ〜〜くまま〜〜ける・とも・はうきと
誰かい歩らん・高運といふ・し・かぎうあれや

天正十八年關白殿下・小田原を討ぞうぼ〜ゑひ・
所々を見物〜あるきたまゑ・時風まのうの里ゑ
て・さ〜〜やうおる・茅の軒ゑ立寄たまひ・このとい
ひ〜婦やある・今ハ・七十ゑ越たるへ〜と・問たま
へハ・白髪の嫗〜のゑくハ・尤仰らゐ〜ハ・尾州の
日吉とのかと・申をきこ〜め〜・いろゑもその日
吉よと仰らゐ・その家ゑ・入御あるく・一日鄙を焼
て・食ふるまひ〜息をかへをとて・黄金一枚たび
〜とぞ

重修真書太閤記十一編巻之廿四終